

追憶

125:城北埼玉中学・高等学校

電鉄線へ乗り換える為に跨線橋を上がると、眼下にポツンと赤い電車が止まっているのが見えた。

高1の夏。僕は旅に出た。

車内は電気が付いておらず、冷房も無い空間に鉄錆と機械油の匂いが漂っていた。反対側には白い服の少女が一人黙って座っている。

目線を少女の後ろの窓に逸らし、外の景色を眺めていると視界が真っ黒になった。

電車がトンネルに入る。

暗い車内にぼんやりと少女の白い服が見える。

電車の音の反響が鈍くなる。

空いてる窓から少しずつ潮の香りが入ってくる。

車内に光が差す。

眩しさから車内に目を移した。

潮風が窓から少女の髪をなびかせる。

日差しが白い服や彼女の色白な顔を輝かせる。

車内に潮の香りとふんわりとした甘い香りが漂う。

それは優しい夏の香りだった。

そこから先の事を私は覚えていない。

今、跨線橋から見下ろしても、赤い電車も少女もそこにはいない。青い海だけが静かに広がっている。

